続千載和歌集

巻第三
夏歌

蛍をよませ給うける　院御製

風そよぐあしまのほたるほのみえて
　波のよるまつほどぞ涼しき

嘉元百首歌奉りし時、おなじ心を　　前大納言俊定

夏ふかくしげるなにはのあしまにも
　さはらで行くはほたるなりけり

嘉元百首歌奉りし時、おなじ心を　　贈従三位為子

大井河空にもゆるやかがり火に
　あらぬほたるのおもひなるらん

弘長内裏百首歌奉りける時、沼蛍　　前大納言為氏

かりてほすあさかのぬまの草のうへに
　かつみだるるは蛍なりけり

百首歌奉りし時　　津守国冬

ほたる飛ぶおぼろのし水かすかにも
　しらばやのおのがもゆるこころを

巻第十
釈教歌

寄蛍恋　　従三位為信

人しれずもゆるおもひはそれとみよ
　袖につつまぬほたるなりとも

寄蛍恋　　藤原為道朝臣

夜もすがらもゆるほたるに身をなして
いかで思ひのほどもみせまし

寄蛍恋　　津守国夏

もゆとだに人にしられぬ思ひこそ
ほたるよりけにみさをなりけれ

「国歌大観」より